

(54) LUBRICANT FOR WARM FORMING OF ALUMINUM MATERIAL

(11) 5-230493 (A) (43) 7.9.1993 (19) JP
 (21) Appl. No. 4-61196 (22) 17.2.1992
 (71) SKY ALUM CO LTD (72) MASAKATSU YOSHIDA(1)
 (51) Int. Cl.⁵. C10M173/02, B21B45/02, B21D22/20//C10M173/02, C10M105/24, C10M125/24, C10N10/02, C10N10/04, C10N30/06, C10N30/08, C10N40/24

PURPOSE: To provide a lubricant which is used for warm forming of aluminum material and gives the material good formability (has good lubricity as a lubricant), causing neither seizure nor galling.

CONSTITUTION: The title lubricant contains an aqueous dispersion of 2.5-20% 12-18C alkyl fatty acid soap whose solubility in water reaches 20% at below 50°C and 2.5-20% CaSO₄ powder having a particle diameter of 0.05-200µm.

(54) FRAGRANT COSMETIC CONTAINING ESSENTIAL OIL FOR SEDATION

(11) 5-230495 (A) (43) 7.9.1993 (19) JP
 (21) Appl. No. 4-73572 (22) 24.2.1992
 (71) KANEBO LTD (72) MASAO KUBOTA
 (51) Int. Cl.⁵. C11B9/00, A61K7/00, A61K7/46, A61K7/48, A61L9/01, C11B9/02

PURPOSE: To provide a fragrant cosmetic containing an essential oil for sedation and excellent in a sedative effect and its persistence.

CONSTITUTION: A fragrant cosmetic containing an essential oil for sedation, which is made by removing high-boiling components from jasmine oil and has a retention time of 0 to 40min in the gas chromatogram (column: DB-WAX (0.25mm in inside diameter, 60m in length) made by J and W Co., carrier gas: helium, carrier gas flow rate: 1ml/min, column temperature: 70-200°C, column temperature rise rate: 2°C/min, detector: hydrogen-flame ionization detector (F.I.D.)).

(54) COMPOUND PERFUME AND AROMATIC COMPOSITION CONTAINING SAME

(11) 5-230496 (A) (43) 7.9.1993 (19) JP
 (21) Appl. No. 4-36033 (22) 24.2.1992
 (71) NIPPON FINE CHEM CO LTD (72) MITSUAKI TANAKA(1)
 (51) Int. Cl.⁵. C11B9/00, A61K7/46, C11D3/50//A61K7/50

PURPOSE: To provide a compound perfume which can maintain a constant quality of fragrance and a constant aroma titer for a long time regardless of its preparation form and application, and an aromatic composition containing the compound perfume.

CONSTITUTION: A compound perfume prepared by blending one or more perfume components belonging respectively to the top note, middle note and base note, wherein the whole or part of at least one perfume component thereof is mixed with other perfume components in the form of a precursor which can be converted into the perfume component through decomposition by the action of an acid, coupled with the acid for decomposing the precursor, and an aromatic composition containing the compound perfume.

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平5-230496

(43)公開日 平成5年(1993)9月7日

(51)Int.Cl. ⁵	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
C 1 1 B 9/00	Z	2115-4H		
A 6 1 K 7/46	A	7252-4C		
C 1 1 D 3/50				
// A 6 1 K 7/50				

審査請求 未請求 請求項の数4(全 8 頁)

(21)出願番号 特願平4-36033

(22)出願日 平成4年(1992)2月24日

(71)出願人 000231497

日本精化株式会社

大阪府大阪市中央区備後町2丁目4番9号

(72)発明者 田中 光昭

兵庫県神戸市灘区赤松町3丁目3番10-205号

(72)発明者 忽那 国彦

兵庫県宝塚市美座2丁目18番28号

(74)代理人 弁理士 三枝 英二 (外4名)

(54)【発明の名称】 調合香料及び該調合香料を含有する芳香性組成物

(57)【要約】

【目的】 製剤形態や用途に関係なく一定した香質及び香気力価を長期に亘り持続できる調合香料及び該調合香料を含有する芳香性組成物を提供することにある。

【構成】 トップノート、ミドルノート及びベースノートの夫々に属する一種又は二種以上の香料成分を配合した調合香料において、香料成分中の少なくとも一種の香料成分の全部乃至一部を、酸の作用により分解して該香料成分となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酸を配合したことを特徴とする調合香料及び該調合香料を含有する芳香性組成物。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 トップノート、ミドルノート及びベースノートの夫々に属する一種又は二種以上の香料成分を配合した調合香料において、香料成分中の少なくとも一種の香料成分の全部乃至一部を、酸の作用により分解して該香料成分となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酸を配合したことを特徴とする調合香料。

【請求項2】 トップノート、ミドルノート及びベースノートの夫々に属する一種又は二種以上の香料成分を配合した調合香料において、香料成分中のトップノートに属する少なくとも一種の香料成分の全部乃至一部を、酸の作用により分解して該香料成分となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酸を配合したことを特徴とする調合香料。

【請求項3】 トップノート、ミドルノート及びベースノートの夫々に属する一種又は二種以上の香料成分を配合した調合香料において、香料成分中の少なくとも一種の香料成分の全部乃至一部を、酸の作用により分解して該香料成分となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酸を配合したことを特徴とする調合香料を含有する芳香性組成物。

【請求項4】 トップノート、ミドルノート及びベースノートの夫々に属する一種又は二種以上の香料成分を配合した調合香料において、香料成分中のトップノートに属する少なくとも一種の香料成分の全部乃至一部を、酸の作用により分解して該香料成分となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酸を配合したことを特徴とする調合香料を含有する芳香性組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、トップノート、ミドルノート及びベースノートの夫々に属する揮発性の異なる種々の香料成分を配合した調合香料の改良及び改良された該調合香料を含有する芳香性組成物に関する。

【0002】

【従来の技術】調合香料は、化粧品、石鹸、食品、芳香剤、浴用剤、洗剤等のほか、文化が進むに従ってますます広範囲に使用され、医薬品、溶剤、殺虫剤、防臭剤、塗料、印刷インクなどにその使用が及んでいる。

【0003】香料の原料を揮発度に従って分類すると、次の三つに分類される。

【0004】(1) トップノート

蒸気圧が高く、におい紙につけておくと2時間以内に揮散して、後に匂いが残らないもので、調合香料のにおいの第一印象を良くするために必要なもの。

【0005】(2) ミドルノート

中程度の蒸気圧を有し、におい紙につけておくと2～6時間においが持続する程度のもので、調合香料のにおい

の骨格をなす部分。

【0006】(3) ベースノート

蒸気圧が低く保留性に富み、6時間以上におい紙に匂いが残るもので、調合香料のにおいの特徴を示す部分。

【0007】調合香料は、上記トップノート、ミドルノート及びベースノートと称される揮発性の異なる多数の香料成分を調合して配合し、個々の調合香料に要求される所定の香質乃至香気を有せしめたものであるが、使用中易揮発性成分が優先的に揮散し、経時的に調合された香料成分の割合が変化し、その結果香質及び香気力価は時間の経過と共に著しく変化してしまい、所定の芳香を一定して長期間持続させることはできないという欠点がある。

【0008】このような問題を芳香剤において解決しようとしたものとして、香料をマイクロカプセルに内蔵してゲル状基材中に分散させて成るゲル状芳香剤組成物が開示されている（特開昭63-260567号公報）。しかし上記方法は、ゲル状製剤に限り有効なもので、例えば液体製剤に適用しようとしてもマイクロカプセルが液体中で浮化又は沈降してしまい所期の効果を得ることができない。

【0009】

【発明が解決しようとする課題】本発明の目的は、製剤形態や用途に関係なく一定した香質及び香気力価を長期に亘り持続できる調合香料及び該調合香料を含有する芳香性組成物を提供することにある。

【0010】

【課題を解決するための手段】即ち、本発明は、トップノート、ミドルノート及びベースノートの夫々に属する一種又は二種以上の香料成分を配合した調合香料において、香料成分中の少なくとも一種の香料成分の全部乃至一部を、酸の作用により分解して該香料成分となる前駆体物質の形態で配合すると共に、該前駆体物質を分解する酸を配合したことを特徴とする調合香料及び該調合香料を含有する芳香性組成物に係るものである。

【0011】即ち、「本発明調合香料」とは、調合される香料成分中の少なくとも一種の香料成分の全部乃至一部を、酸の作用により分解して該香料成分となる前駆体物質の形態で香料成分として配合すると共に、該前駆体物質を分解する酸とを配合されたことを特徴とする。

【0012】「酸を配合する」とは、該前駆体物質を含む香料成分と、混合して存在すること、及び別々に存在して使用時に両者が接触できる状態で組み合わせることを含む。

【0013】本発明者の研究によれば、上記の通り調合香料に含まれる香料成分の少なくとも一種の全部乃至一部を前駆体物質の形態で配合し、これを酸と共に使用したときは、該前駆体物質と酸との緩やかな反応の進行に伴って香料成分が徐々に揮散し、各香料成分は所定の配合バランスを保って揮散し、一定の香質及び香気力価を

長期間持続させ得ることが見出された。特に前駆体物質として易揮散性のトップノート成分を配合するのが好ましく、効果的に所望の目的を達成することができる。

【0014】本発明において、調合香料の基本配合は常法に従いトップノート、ミドルノート及びベースノートの夫々に属する一種又は二種以上の香料成分を配合して行われる。

【0015】トップノート香料成分としては、例えばリナロール、エチルアセテート、オクチルアルデヒド、ペンズアルデヒド、フェニルアセトアルデヒド、青葉アルコール、ギ酸フェニルエチル、樟脳、テルピネオール、 α -リモネン、 α -メントール（エルメントール）、3-オクテノール、テトラヒドロリナロール、ボルネオール、イソプレゴール、ベンジルアルコール、ジメチルベンジルカルビノール、メチルフェニルカルビノール、ジメチルフェニルカルビノール等が挙げられる。

【0016】またミドルノート香料成分としては、例えばテルピネオール、グラニオール、シトロネロール、シトロネラール、デシルアルデヒド、ベンジルアセテート、シトラール、オイゲノール、フェニルエチルアセテート、シトロネリルアセテート、グラニルアセテート、テルピニルアセテート、アセトフェノン、チモール、イソオイゲノール、ボルニルアセテート、ベンジルプロピオネート、9-デセノール、ネロール、ロジノール、ジメチルオクタノール、ラバンジュロール、ムゴール、ミルセノール、テトラヒドロムゴール、 β -フェニルエチルジメチルカルビノール、 β -フェニルエチルメチルエチルカルビノール、フェノキシエチルアルコール等が挙げられる。

【0017】またベースノート香料成分としては、例えば γ -ウンデカラクトン、エチルメチルフェニルグリシデート、ヘキシルシンナミックアルデヒド、フェニルエチルアルコール、ムスコン、シベトン、メチルヨノン、ヨノン、cis-ジャスモン、バニリン、シンナミックアルコール、サイクラメンアルデヒド、ファルネソール、ヒドロキシシトロネロール、ボルニルメトキシシクロヘキサノール、ノボル、ネロリドル、サンタロール、サンダロール、セドロール、ベチペロール、パチュリアルアルコール、インドール、スカトール、アニスアルコール、 γ -フェニルプロピルアルコール、 α -アミルシンナミックアルコール、フェニルグリコール、第3級ブチルシクロヘキサノール、安息香酸、桂皮酸、ヒドロ桂皮酸、フェニル酢酸、2-メチルテトラヒドロキノリン、6-メチルキノリン等が挙げられる。

【0018】一般に調合香料は、常法に従い上記トップノート、ミドルノート及びベースノートの夫々に属する香料成分の一種又は二種以上を所定の香質乃至香気得られるように多数配合して調製される。

【0019】本発明においては、上記調合香料の基本配合において用いられる香料成分、好ましくはトップノ

トに属する香料成分の少なくとも一種の全部乃至一部を、酸により分解して香料成分を生成する前駆体の形態として、酸と共に配合する。

【0020】本発明における前駆体物質としては、酸により分解し香料成分を生じるものであれば特に制限されず、公知の香料成分の配糖体、グリセライド、アミノ酸若しくはペプチドの誘導体、環状アセタール化合物等を広く使用することができる。

【0021】上記配糖体としては、例えばアルコール系香料成分の配糖体等が使用でき、アルコール系香料成分を式R-OHとすると一般式：



(式中、Gはグリコシル残基を示す。)で表わすことができる。

【0022】上記一般式(1)中Gで示されるグリコシル残基としては公知の各種の単糖類、オリゴ糖類、多糖類等の糖類から得られるものを何れも使用できる。

【0023】上記単糖類としては、例えばグルコース、ガラクトース、マンノース、グルコサミン、ガラクトサミン、マンノサミン等の六炭糖類、アラビノース、キシロース、リボース等の五炭糖類等を例示することができる。

【0024】オリゴ糖類としては、例えばシュクロース、ラクトース、トレハロース、マルトース、セロビオース、イソマルトース、ゲンチオビオース、ラミナリビオース、キトビオース、キシロビオース、マンノビオース、ソホロース、マントトリオース、デンプン又はセルロース等の加水分解物等を例示することができる。

【0025】また、多糖類としては、例えばデンプン、セルロース等を例示することができる。

【0026】これらの中でもグルコース、ガラクトース、マンノース、グルコサミン、マルトース、ラクトースが特に好ましい。

【0027】アルコール系香料成分としては、例えば青葉アルコール、3-オクテノール、9-デセノール、リナロール、グラニオール、ネロール、シトロネロール、ロジノール、ジメチルオクタノール、ヒドロキシシトロネロール、テトラヒドロリナロール、ラバンジュロール、ムゴール、ミルセノール、テルピネオール、 α -メントール（エルメントール）、ボルネオール、イソプレゴール、テトラヒドロムゴール、ボルニルメトキシシクロヘキサノール、ノボル、ファルネソール、ネロリドル、サンタロール、サンダロール、セドロール、ベチペロール、パチュリアルアルコール、ベンジルアルコール、 β -フェニルエチルアルコール、 γ -フェニルプロピルアルコール、シンナミックアルコール、アニスアルコール、 α -アミルシンナミックアルコール、ジメチルベンジルカルビノール、メチルフェニルカルビノール、ジメチルフェニルカルビノール、 β -フェニルエチルジメチルカルビノール、 β -フェニルエチルメチルエチル

カルピノール、フェノキシエチルアルコール、フェニルグリコール、第3級ブチルシクロヘキサノール等を例示することができる。

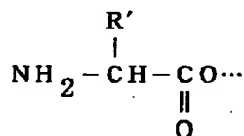
【0028】上記グリセライドとしては、例えばグリセリンとカルボン酸系香料成分とのモノグリセライド、ジグリセライド又はトリグリセライド等を使用することができる。

【0029】上記カルボン酸系香料成分としては、例えば安息香酸、桂皮酸、フェニル酢酸、ヒドロ桂皮酸等を例示することができる。

【0030】また、アミノ酸もしくはペプチドの誘導体としては、例えばアルコール系、カルボン酸系、アミン系香料成分等のアミノ酸もしくはペプチドの誘導体を使用することができ、アミノ酸又はペプチドを式：

【0031】

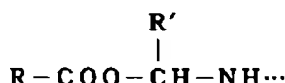
【化1】



【0032】で表わし、アルコール系香料成分、カルボン酸系香料成分及びアミン系香料成分をそれぞれ式： $\text{R}-\text{OH}$ 、 $\text{R}-\text{COOH}$ 及び $\text{R}-\text{NH}_2$ で表わすとする、次の一般式で表わすことができる。

【0033】

【化2】



【0034】、

【0035】

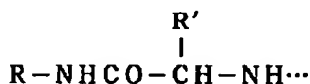
【化3】



【0036】及び

【0037】

【化4】



【0038】上記アミノ酸又はペプチドは公知のものを何れも使用できる。アミノ酸としては、例えばグリシン、アラニン、バリン、ロイシン、イソロイシン、セリン、トレオニン、システイン、シスチン、メチオニン、アスパラギン酸、グルタミン酸、リシン、アルギニン、チロシン、フェニルアラニン、ヒスチジン、トリプトファン、プロリン、オキシプロリン等を例示することができる。またこれらのアミノ酸が2個以上結合したペプチ

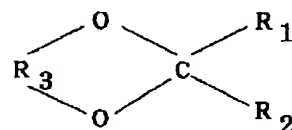
ドも使用できる。

【0039】アルコール系及びカルボン酸系香料成分としては、前記と同じものを例示でき、アミン系香料成分としては、例えばインドール、スカトール、2-メチルテトラヒドロキノリン、6-メチルキノリン等を例示することができる。

【0040】上記環状アセタール化合物

【0041】

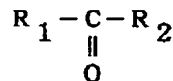
【化5】



【0042】は、例えばアルデヒド、ケトン等のカルボニル化合物系香料成分

【0043】

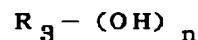
【化6】



【0044】と分子中に近接する複数の水酸基を有するポリオール化合物

【0045】

【化7】



【0046】(nは2以上)とを反応させることによって得られる。

【0047】上記アルデヒド系香料成分としては、n-ヘプチアルデヒド、n-オクチアルデヒド、n-ノニルアルデヒド、n-デシルアルデヒド、n-ウンデシルアルデヒド、ウンデシレンアルデヒド、ドデシルアルデヒド、メチルノニルアセトアルデヒド、n-トリデシルアルデヒド、n-テトラデシルアルデヒド、n-ヘキサデシルアルデヒド、ノナジエナル、シトラール、シトロネラル、ヒドロキシシトロネラル、ペリラルデヒド、ベンズアルデヒド、フェニルアセトアルデヒド、フェニルプロピルアルデヒド、シンナミックアルデヒド、α-アミルシンナミックアルデヒド、α-ヘキシルシンナミックアルデヒド、アニスアルデヒド、クミンアルデヒド、ヘリオトロピン、ヘリオナル、サイクラメンアルデヒド、p-第3級ブチル-α-メチルヒドロシンナミックアルデヒド、サリチルアルデヒド、ヒドロトロパアルデヒド、バニリン、エチルバニリン、4-(4-ヒドロキシ-4-メチルペンテル)-3-シクロヘキセン-1-カルボキシアアルデヒド、マイラックアルデヒド、シトロネニルオキシアセトアルデヒド等が挙げられる。

【0048】上記ケトン系香料成分としては、メチル-n-アミルケトン、エチル-n-アミルケトン、メチル

ー n ーヘキシルケトン、メチルー n ーノニルケトン、メチルヘプテノン、ジアセチル、1ーカルボン（エルーカルボン）、 d ーカルボン、メントン、 d ープレゴン、ペリトン、樟脳、メチルセドリロン、アセトフェノン、 p ーメチルアセトフェノン、 p ーメトキシアセトフェノン、ベンゾフェノン、ベンジリデンアセトン、メチルナフチルケトン、ヨノン、ダマスコン、ダマセノン、イロン、エチルマルトール、ヒドロキシフラノン、ネロン、ヒドロキシフェニルブタノン、アニシルアセトン、ジャスモン、ジヒドロジャスモン、ヌートカトン等が挙げられる。

【0049】上記ポリオール化合物としては、公知の各種の単糖類、オリゴ糖類、多糖類等の糖類、多価アルコール類等を挙げることができる。

【0050】上記単糖類としては、例えばグルコース、ガラクトース、マンノース、グルコサミン、ガラクトサミン、マンノサミン等の六炭糖類、アラビノース、キシロース、リボース等の五炭糖類等を例示することができる。

【0051】オリゴ糖類としては、例えばシュクロース、ラクトース、トレハロース、マルトース、セロビオース、イソマルトース、ゲンチオビオース、ラミナリビオース、キトビオース、キシロビオース、マンノビオース、ソホロース、マントトリオース、デンプン又はセルロース等の加水分解物等を例示することができる。

【0052】また、多糖類としては、例えばデンプン、セルロース等を挙げることができる。

【0053】多価アルコール類としては、グリセリン、ソルビトール、ペンタエリスリトール、トリメチロールプロパン等を挙げることができる。

【0054】本発明は、調合香料中の香料成分の少なくとも一種の全部又は一部、或いは二種以上の香料成分の全部又は一部を、前駆体物質の形態で配合することを必須とする。前駆体物質として配合される上記香料成分としては、調合される他の香料成分との組み合わせにより適宜選択することができ、必要に応じて複数の前駆体物質を組み合わせることもできる。特に好ましくは、従来の調合香料において使用初期にその多くが揮散し減少してしまうトップノート成分の不足分を補う目的でその前駆体物質を配合することである。

【0055】上記前駆体物質は、香料成分として従来の調合香料の処方と変わりなく種々の処方で用いられ得る。

【0056】一方、本発明において上記前駆体物質を分解するのに配合される酸としては、配合された前駆体物質に作用し香料成分を生成させ得るものであれば特に限定されることはなく、前駆体物質と組み合わせる用いられる。本発明における酸の代表的なものは、塩酸、硫酸、硝酸、ピロ硫酸、リン酸、塩素酸、ケイ酸、チオシアン酸、ヨウ素酸等の無機酸、アジピン酸、サリチル

酸、安息香酸、リンゴ酸、酢酸、ギ酸、 p ートルエンスルホン酸、イソ吉草酸、クエン酸、シュウ酸、トリクロル酢酸、フルオロ酢酸、トリフルオロ酢酸、フマル酸、ブロム酢酸、トリブロム酢酸、ベンゼンスルホン酸、マレイン酸、ヨード酢酸、フェニル酢酸、 p ーニトロ安息香酸、 p ーアミノ安息香酸、 p ーメトキシ安息香酸等の有機酸を挙げることができる。

【0057】上記酸の使用量としては、酸との反応を生起させる量以上であれば特に制限されないが、通常前駆体物質に対して0.1～200重量%程度、より好ましくは1～100重量%程度とするのがよい。

【0058】本発明において、前駆体物質と酸との組み合わせ又は酸の前駆体物質に対する量によって、緩やかに反応が進行し、香料成分を徐放させることができる。

【0059】本発明調合香料は、前駆体物質と酸とを分離した状態とし使用時に接触させて用いる二剤型として配合してもよいし、両者を一剤型として配合してもよい。

【0060】本発明は、上記の本発明調合香料を含有する芳香性組成物にも係るものである。本発明芳香性組成物は、上記本発明調合香料が配合され該香料に基づく芳香を発する各種の組成物を包含する。

【0061】具体的には、例えば香水、オーデコロン、シャンプー、リンス、石鹸、整髪料、洗口液、制汗剤等の化粧品、清涼飲料、菓子、冷菓、乳製品、酒類、肉、歯磨粉、タバコ等の食品、衣料用、台所用、住居用、風呂用等の芳香剤、浴用剤、洗剤等を挙げることができる。

【0062】より具体的には、次のような適用例を例示できる。

【0063】・本発明調合香料を構成する香料と前駆体物質を含む液剤、粉剤、ゲル剤又は錠剤である主剤と、酸を含む液剤、粉剤、ゲル剤又は錠剤である副剤との組み合わせによる芳香剤、浴用剤、洗剤等。

【0064】・本発明調合香料を構成する香料と前駆体物質を含む液剤を、酸を固定化した芯材又は酸を固定化した揮散紙を通して揮発させる芳香剤。

【0065】本発明芳香性組成物において、本発明調合香料に加えられる添加剤は、この種の芳香性組成物に通常添加されるものであれば、特に限定されるものはない。

【0066】

【実施例】以下実施例及び比較例を示し、本発明の特徴とするところをより一層明確なものとする。

【0067】尚、以下において「%」とあるのは、「重量%」を意味する。

【0068】また、以下に調合香料と記載されているのは、上記記載の通り、トップノート、ミドルノート、ベースノートの夫々に属する香料成分を配合したものである。

【0069】実施例1

シブレー系調合香料	3.00%
ボルニルグルコシド	0.15%
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	3.00%
エタノール	5.00%
水	88.85%
	100.00%

上記組成の液剤を次のようにして調製した。

【0070】水を除く上記原料を室温で10分間攪拌混合し、その後水を加えて更に10分間混合溶解させた。

【0071】得られた液剤100mlをボトルに入れ、芯材を介して、予め塩酸0.1gを添加した揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0072】比較例1

ローズ系調合香料	0.500%
β-フェネチルグルコシド	0.025%
ポリエチレングリコール	8.000%
リンゴ酸	20.000%
ソーダ灰	71.475%
	100.000%

上記組成の液剤を次のようにして調製した。

【0075】ポリエチレングリコール、リンゴ酸及びソーダ灰をヘンシェルミキサーにて10分間攪拌混合した後、攪拌を続けながらローズ系調合香料及びβ-フェネチルグルコシドを噴霧付香した。

【0076】得られた液剤50gと塩酸0.01gを別々に浴槽の湯（約40℃）に入れて1分間攪拌した後、香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

フローラル系調合香料	3.0%
フェネチルグルコシド	0.15%
寒天	1.5%
グリセリン	1.0%
硫酸	0.1%
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	1.0%
水	適量
	100%

上記組成の芳香剤を次のようにして調製した。

【0080】水、寒天、グリセリンを混合し、97℃で30分間攪拌溶解した。溶解後、60℃まで冷却し、フローラル系調合香料、フェネチルグルコシド及びポリオキシエチレンノニルフェニルエーテルを加え、更に硫酸を添加後水を適量加えて100gに調整し、10分間混合した。混合後、ゲル状芳香剤用容器に充填し冷却固化し、揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行★

フローラル系調合香料	50%
フェネチルグルコシド	10%
硫酸	0.5%
イソパラフィン	39.5%

* 実施例1において、ボルニルグルコシドに代えてボルネオールを使用し、塩酸を添加しない以外は、実施例1と同様にして一般的な液状芳香剤を調製した。

【0073】この芳香剤100mlをボトルに入れ芯材を介して、揮散紙を通して揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0074】実施例2

※【0077】比較例2

実施例2において、β-フェネチルグルコシドに代えてβ-フェニルエチルアルコールを使用した以外は同様にして一般的な液剤を調製した。

【0078】得られた液剤50gを浴槽の湯（約40℃）に入れて1分間攪拌した後、香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0079】実施例3

★なつた。その結果を表1に示す。

【0081】比較例3

実施例3において、フェネチルグルコシドに代えてフェニルエチルアルコールを使用し、硫酸を使用しない以外は実施例3と同様にして、ゲル状芳香剤を調製し、揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0082】実施例4

50	50%
	10%
	0.5%
	39.5%

上記原料を室温で10分間攪拌混合して調製した。

【0083】混合した液剤10gを、直径約10cm、厚さ約0.5cmの不織布に含浸させ、芳香剤を調製した。

【0084】この芳香剤から揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0085】比較例4

100.0%

* 実施例4において、フェネチルグルコシドに代えてフェニルエチルアルコールを使用し、硫酸を使用しない以外は実施例4と同様にして、含浸された芳香剤を調製し、揮散させたときの香りを下記の基準で官能評価を行なった。その結果を表1に示す。

【0086】

【表1】

*

実施例 及び 比較例	経過 時間	実施例		比較例	
		香 質	香気力価	香 質	香気力価
1	直 後	4.0	4.0	4.0	4.0
	1週間	4.0	4.0	3.8	3.9
	2週間	4.0	4.0	3.6	3.5
	3週間	3.9	3.8	3.4	3.4
	4週間	3.7	3.8	3.1	3.0
2	直 後	4.5	4.3	4.5	4.3
	30分	4.5	4.1	4.0	3.7
	60分	4.4	4.0	3.8	3.5
	90分	4.4	3.9	3.3	3.4
	120分	4.2	3.9	3.0	3.1
3	直 後	4.0	4.0	4.0	4.0
	1週間	4.0	4.0	3.8	3.9
	2週間	3.8	3.9	3.7	3.5
	3週間	3.7	3.8	3.4	3.3
	4週間	3.7	3.8	3.0	3.1
4	直 後	4.0	4.0	4.0	4.0
	1週間	3.9	3.9	3.9	3.9
	2週間	3.8	3.8	3.6	3.7
	3週間	3.8	3.8	3.6	3.4
	4週間	3.7	3.8	3.1	3.1

【0087】実施例5

ウッディー系調合香料

3.00%

桂皮酸モノグリセライド

50

0.15%

13

ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	3.00%
エタノール	5.00%
水	<u>88.85%</u>
	100.00%

上記組成の液剤を実施例1と同様にして調製した。

【0088】即ち、水を除く上記原料を室温で10分間攪拌混合し、その後水を加えて更に10分間混合溶解させた。

フローラル系調合香料	3.00%
1, 2, 5, 6-ジ- α -メチルヘキシリデン - α -グルコフラノース	0.15%
ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル	3.00%
エタノール	5.00%
水	<u>88.85%</u>
	100.00%

上記組成の液剤を実施例1と同様にして調製した。

【0091】即ち、水を除く上記原料を室温で10分間攪拌混合し、その後水を加えて更に10分間混合溶解させた。

【0092】上記液剤が、芯材を介して、予め安息香酸 20 0.1gを添加した揮散紙を通して揮散するようなボトルに、液剤100mlを入れて芳香剤を調製した。

【0093】宜能評価

〔方法〕得られた芳香剤を、室温25℃下、約2m³の無臭ボックス内におき、香質及び香気力価をパネラー6名により評価した。但し、実施例2及び比較例2は、浴室における浴剤の香質及び香気力価を評価した。尚、※

14

*【0089】上記液剤が、芯材を介して、予めクエン酸 0.1gを添加した揮散紙を通して揮散するようなボトルに、液剤100mlを入れて芳香剤を調製した。

*【0090】実施例6

※前記表1中には、上記6名の平均値として示してある。

【0094】〔評価基準〕

基準	香質	香気力価
5	良い	強い
4	やや良い	やや強い
3	どちらでもない	
2	やや悪い	やや弱い
1	悪い	弱い

【0095】

【発明の効果】本願発明調合香料により、各香料成分は所定の配合バランスを保って揮散し、一定の香質及び香気力価を長期間持続させることができる。